（郵便物認可）　（日曜日休刊）　（定價金二錢）

時事新報

第千四百七十六號　火曜日
明治二十年一月四日
舊丙戌十二月十一日
（己巳）
（西暦一千八百八十七年）

時事新報定價
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓
〇時事新報ハ直接ニ郵便ニテ送呈スルモノニ限リ本文定價ノ外ニ一箇月二十六錢ノ郵税ヲ申受ク

時事新報廣告料前金一行ニ付

	一行廿四字詰	一箇限	二日以上	七日以上	十六日以上
自	行至十行	錢八	錢七	錢二	厘六
自	一行至十行	錢七	錢六	錢三	厘五
三十一行以上	行以上	錢六	錢五	厘五	錢九
			厘五	厘八	厘五
				厘五	毛五
				錢五	錢五
				厘	厘

時事彙報

歐洲戰亂の風説

一千八百七十年普佛の大戰爭次に七十七年露土の戰爭以來歐洲大陸の天地にて久しく戰爭の沙汰と聞かざりしが近來バルガリヤに事件起るとより歐洲一帯の空い何となく雲行惡しく最近の電報を見るに墺國と露國とい今春を期して戰端を開かん爲め昨今い兩國ともに戰備の最中なりおもいふ風説頻りに行はるゝ由抑も事れ起りと尋るゝ昨年八月東歐のバルガリヤに於て革命の乱發裂し國主アレキサンドル公は革命黨の爲に位を廢せらるとて國外に放逐せられしが間もなく擾乱平きて公は無事に歸國したれども其隣邦なる露國皇帝い公のバルガリヤに君臨するは同國を再び擾乱の危難に陥らしむるものなりとなる公の同國にあらん限りは一切保護を與へざるべしと申送りたるを以て公は勢、止むと得ず位を辞し國を立去り跡は無君の有様となりしに付同國にては暫政々府を設けて暫りに政を攝し國會に於て丁抹の皇子ツーブマーク公を其國主に選擧したるは皇子は之を辞したるを以て更に西亞細亞の小邦なるコングレヤ國公を選擧したれども公を國主とおす事に就ては歐洲列國中に不同意の向きもあり且はバルガリヤの人民も公を國主と戴く事を欲せざるやにて未だ登位の場合に至らず又一方にては露國れ干渉を甚しく國内の人心分離して互に黨派を結び國情紛々底止する所を知らざる有様なりと云ふ蓋露國がバルガリヤの事に干渉せんとするは一朝夕の事に非ずして一昨年の九月中東ローメリヤが土耳其に反してバルガリヤと聯合しアレキサンドル公と其君主と戴く事と主張したるより忽ち歐洲全土の大問題となり各國の使臣ハコンスタンチノープルに會し長き時月の間幾度とおく會議を開けども未終あ昨年の四月に至りアレキサンドル公を以て五箇年間東ローメリヤの太守とおす事に決せしが元來ローメリヤの反乱い露國の教唆に出でざるものにて露國は之に依て大に利する所あらんとしふるも其目的を達せざりしを以て更にセルヴヤヤと煽動してバルガリヤ、ローメリヤ兩國の聯合と破らんとせしにセルヴヤヤ社却て兩國の爲に敗を取り且つ墺國の勧告に從ひ兩國を動員を制ふるに至りたるは露國の計略は又も水の泡とおりれ終るに露國いかくの如く其計略の屢ば顛覆するを以て今度と更に手を替へてバルガリヤに内部に入込み其國の人々を取入りて窃ひ蔭謀の愛と企てたるものにてバルガリヤの革命事變に關して露國が干渉せしたる形迹は歴人可らざるの疑を抱くものあらん事に就ては平渉したるものルーメリヤ將軍を同國に歸還して其内部に平渉したるものあるは歐洲列國を驚したる處置と申すべきなりされば列國中殊に墺國の如きは從來れ關係と云ひ地理上の位置と云ひバルガリヤの事に關しては利害痛痒を感すること最も深き國柄なれば露國の感觸に對して第一に故障を申入るゝは素より當然れ事なるべし勿論墺地利一國の力のみあては露國と抗するに足らざるべしと雖も墺國と獨逸との交際は近來頗る親密よして昨年五月兩國の皇帝ガスターンに會合あり し後と格別の交情を增し兩國間に密約の成立ち居ると の説さへある程の間柄なれば墺國い必定獨逸と後盾と頼むことあらんが獨逸には其隣に佛國といへる勁敵の輙もすれば積年の怨恨と干戈に訴へんとし近來は露國と深く相結び共に獨逸れ際を窺ひ居る由なれば獨逸は バルガリヤの事に就ては先ず容易に手を出さぬ方なるべし又英國は東方の事には隨分關係多き國なるが今回の事に關しては如何なる舉動をも顧はさゝるは多分バルガリヤの事に就て最も其利害の關係多き墺獨諸國の進退如何を觀望そるるれなるべしされば今日の處にて露國れ舉動に向つて故障と申入るゝの地位に立つるのは唯墺地利一國に止まるが如しと雖も然れども露國をして獨り其威力をバルガリヤに恣にせしむる事は素より歐洲列國の利にあらざして且つは明かに一千八百七十八年伯林條約の文面に違背する所業なればもし露國にして今後猶を愈よその狂暴の舉動を逞くせんとするに至らば歐洲列國は最早之と捨置く能はずして墺國獨逸及び伊太利の如きは共に連合して以て露國の鋒に當ることあらん果して此の如き場合に立至る時には英國の如きもバルガン半島に露國の勢力を擅ゐせしむるは最もその好まざる所なれば勿論墺國等と同盟することならん結局一方は墺國、英國、獨逸、伊太利の四國同盟し一方い露佛兩國同盟し近年未曾有の大戰亂を歐洲の中原に現出するに至るもとおふん勢に於て免かる可らざるものゝ如き

右の如く陳べ來れば歐洲の大戰亂は今にも其端を開く可きが如くに聞えく甚ぶ急なるが如くなれども又一方より人間社會の情態と觀察するときは事物の關係千差萬別にして自から多少の餘裕あるを得ず抑も露國が愈よ其志をバルガリヤに逞くし全威をバルカン半島に奮はんとするには墺國獨逸は申迄もなく英國をも相手にせるの覺悟なかるべからず露國は版圖廣大ふして廣く歐亞の兩土に跨り壓然北方の雄を稱するには足るべしと雖も歐洲の中原ふ驅出し歐洲列國と相手として雌雄を決するの一段ふ至ては甚ぶ覺束なく思はるゝなり又佛國の如きも愈よ露國と同盟するの日に至らば陸には獨逸の精兵を引受け海には英國の艦隊と引受くるものと覺悟せざる可らず而して伊太利も無論獨英諸國ふ同盟加擔するものふるべし佛國は四隣に敵と引受くるものと云ふべく果して其覺悟ありや否や聊の疑ひあるを得ず且つ從來歐洲れ形勢危急ふ迫れりとか戰亂近きに在り杯云ふ風説は我輩の毎度耳にもする處にて敢て今日に始りたる事には侮ふされども實際に於て容易に其破裂を見ざるも亦自から期はれなきに非ず近來鐵道電信の備益進して運輸交通の便大に開くるに隨ひ軍備上の事も亦大に進歩し歐洲諸國にては即時に幾十萬れ兵を集め直ちに之を國境ふ操出すの準備あふざるはなく總て戰ひは敵の不意に乘するを以て上策とする事あるに此の如くに各國競て戰備と修むるを以て其備れ益す整ふと同時ふ戰爭を起もの機會益す減ずべきは當然の事にして蓋し此十年間歐洲に大戰爭あきものい戰の種あきが爲にい非ずして戰の機會あるが爲めあらん又一方にて商賈殖產の業益す盛大ふ赴くに隨ひ政治上の權力、重もに財產のある處に歸するを以て各國ともふ成べく戰爭の危險を避け商賈殖產の安全と謀るの實あると以て益も戰爭を減ずる傾と來せるが如し歐洲戰亂の風説は猶ふ雷れ如く又電の如し其聲々閃々の狀は甚だ恐るべきが如しと雖も實際下擧の禍は思ひれ外に稀なるものにして蓋し所謂外交政略あるものいこの雷鳴電閃の音響を利用して倏忽喊嗟の間ふ行はるゝものあり さきば今回バルガリヤ事件よりして歐洲の戰亂を生せんとするの風説の如きも我輩の見る處にてい大に之を利用するものありて實際い下擧の禍と見るに至らずして止まんかと思はるゝあり

雜報

○大坂歳晩の餘報　舊臘三十一日大坂發の報知ふ曰く當地歳晩の景況い既に報道ふ及びさるが其後別段の變狀いなけれども金融は益々不活潑を極め銀行及び市中の金滿家い去る二十五六日頃より本日に至るまで必ず金融頻繁なるの日あふんとて金を積ふ借人の來るを俟構へたるに豈圖らんや取引商賈人の不景氣より金子の當用日おく却て二十七八日頃より預け金を爲す者あるの有様なれバ金利は反て二十四五日頃より下落し今三十一日れ如況は銀行交換所日歩一錢五厘市中一錢七八厘より二錢まで となりふり斯る景況なれば商賈上の不活潑は推しく知る可きのみ唯一月用の小賣物に可あり れ賣捌け方あるも多く下等品のみにて上等舶來小間物又い絹布類なぞは賣口甚だ惡し斯る景況にて商業上ふ資金と要するとおきの見込あるにや本月れ納め相場後諸株券い追々望人多く僅かの間ふ非常の高直を顯はしたるものあり 坂界鉄道株の如きは凡七圓方も引上げ日本銀行株も五圓方騰貴し其他何株ふ拘らず平均凡三圓方の上進なり今諸公債株券の實地取引の相場と率れば七分利付金禄公債百四圓五十錢、六歩利付公債百三圓四十錢、起業公債百三圓七十錢、中山道鉄道公債百八圓十錢、海軍公債百一圓九十錢、公債九十五圓、舊公債三十三圓、日本銀行株二百六十圓、郵船株六十九圓三十錢、坂界鉄道株百四十二三圓、商船會社株四十三圓四五十錢、三軒屋紡績株二百七十五圓等あり又堂島米相場の氣配い納相場蓬津米二十年二月限五圓二十八錢なりしも二三錢方騰貴の氣配にて同國現米は納相場五圓六十五錢なりしも前條の如く金融れ緩慢なるより金利の安況に付荷主い賣急がず來る一月ふは五六錢方も騰貴の見込を立て居るは所謂元ハヤリの姿にて今日にては五圓七十錢即ち納め相場より五錢ぶた騰貴の氣配あり

○清國の回教　回教は滿清到る處に傳播して勢力は決して佛教に劣らざるべし今其れ由來を尋ぬるに回教の支那に入りたるは早く己に唐朝以前に在るものと考へらる唐の祿山の乱に郭子儀回兵數千人を借りて功と奏し其後回兵と以て禁兵と爲し勢威甚ぶ高のりふ是を以て回國使の來る毎ふ赤必らず厚く之を遇せり故ふ回人愈々集り遂に倉廩給がるに至れり然るに回兵其の功あると恃み驕横益々甚しきを以て朝廷之を憂ひ各地に分遣して始て其の勢力を割ひたり朝來今に至る迄依然として當を守り到る處に一團結と爲ふ各處ふ寺塔を設け(清眞寺是あり)阿叶と稱する者と置けり(馬書歌れ教師と云ふが如し)寺に住する者一二人より六七人に至る)若ふ信徒は必らず行て經を誦たる物等を食ふと云ふり又沐浴の時には誕祿齋戒の時には終日斷食夜に入て漸に毫毛を生せざるを以て僅に頭髪と眉毛と唇毛とのみ婦人の衣服風祿山の乱ふ婦女多く婦女皆歸るに家なに與へたり因て此信徒其の數精算をるるものにて多くいの業に從事せり(清國陝西の二省は回大抵百戸に付六七回民の居とを南方四川貴州邊に至て皆營兵武辨宰牛販とさは婦孺に至るの風ある推して知れ亂あり何時再び勢清國よりの近信ふ

○伊太利の紀念日　馬と戰ふて勝利と國ふていの之と祝せる老兵を始め七ンダナせで樂隊、戰死者の墓碑にと爲したるもあり

○墺地利皇帝　は本を禊せふゝが全く此禊烟ふ原因と禁せられんこゝ

○倫敦の繁昌　又其餘聞と記すれ口殆んど五百萬と街を連續して一繰べく戸數七十萬ふッセル(殆んど三百、豚合して四百萬三萬餘ふして飲料ート七六合三勺餘億八千萬クワート二河及び海より還一ガロンは二升五口中には種々の人方ふ至らずして世ると得べし府内の口よりも多くスコットランドれ都會カーディフ(ウェルランド人は口よりも多くして奉ることを許さ

○芝居の鐵炮　演に俳優の怪我をあ工風は俳優に取エドワード七世を用ふると爲す

○清國の回教　回教は滿清到る處に傳播して勢力は決して佛教に劣らざるべし今其れ由來を尋ぬるに回教の支那に入りたるは早く己に唐朝以前に在るものと考へらる唐の祿山の乱に郭子儀回兵數千人を借りて功と奏し其後回兵と以て禁兵と爲し勢威甚ぶ高のりふ是を以て回國使の來る毎ふ赤必らず厚く之を遇せり故ふ回人愈々集り遂に倉廩給がるに至れり然るに回兵其の功あると恃み驕横益々甚しきを以て朝廷之を憂ひ各地に分遣して始て其の勢力を割ひたり朝來今に至る迄依然として當を守り到る處に一團結と爲ふ各處ふ寺塔を設け(清眞寺是あり)阿叶と稱する者と置けり(馬書歌れ教師と云ふが如し)寺に住する者一二人より六七人